



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	オホーツク海周辺に見るシマフクロウの過去の生息環境：アイヌ民族における高位神起源の検討
Author(s)	竹中, 健
Citation	サハリンにおけるオホーツク文化の形成と変容・消滅：日ロ共同シンポジウム, 5, 146-153
Issue Date	2002-02-28
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/73772
Type	conference paper
File Information	146-153.pdf



オホーツク海周辺に見るシマフクロウの過去の生息環境： アイヌ民族における高位神起源の検討

竹中健（シマフクロウ環境研究会）

はじめに

シマフクロウ(*Ketupa blakistoni*)は日本では北海道および北方領土(国後、択捉)にのみ生息する世界最大のフクロウである。北海道における生息数は現在わずかに 120 羽程度で絶滅危惧種に指定されている。魚食性で大径木の樹洞で繁殖するシマフクロウは自然度の高い環境に依存するが、明治以降の北海道の開拓の進行とともに生息環境が悪化して生息地が狭められ生息数が激減した。いっぽう、国外ではロシア極東地域に分布しており、サハリン島および、シホテアリニ山脈からマガダン周辺に至る日本海、オホーツク海沿岸を分布域としている(Fig.1)。大陸のシマフクロウは日本のものとは別亜種で体色や鳴声が違うが生態はほぼ同じである。ロシアの生息地の多くは自然環境が豊かであるため、シホテアリニ山脈北部を中心に生息数が多いと推定されている(Surmach unpublished)。ところで、サハリン島に分布する個体群は日本と同種であると考えられているが、大陸と冬季は陸続きになるため一部地域で大陸個体群と交流がある可能性があり、最終氷期以降の生物分化を考える上で貴重な地域であるが、近年生息情報が少ないため詳細な状況は不明である。

いっぽう、シマフクロウはアイヌ民族には一般的にコタンコロカムイと呼ばれ、部落を守護する神として敬われている。またアイヌの行う祭事イオマンテは、ヒグマよりも厳粛であったと言われている。周知のようにイオマンテに類する熊祭りは北方圏諸民族の間でも行われており、アイヌのイオマンテのオホーツク文化起源説がある。

またシマフクロウは現代社会においても近年急速に人気の高くなった生物であるが、その原因は、大きさや姿が与えるインパクトや絶滅寸前という状況に加えて、アイヌ文化や原始自然の象徴としてのノスタルジー要素が強いためである。

現在日本のシマフクロウは絶滅の危機に瀕しており、生息地の保護事業が民間や環境省で行われているが、今後のシマフクロウの保護のためには、自然度の高い地域での生息状況の把握と言う自然科学的側面に加えて、アイヌがシマフクロウを特に大切に扱った理由について社会科学的検討が重要である。特にアイヌとシマフクロウの関係においては、シマフクロウの分布域がほぼオホーツク

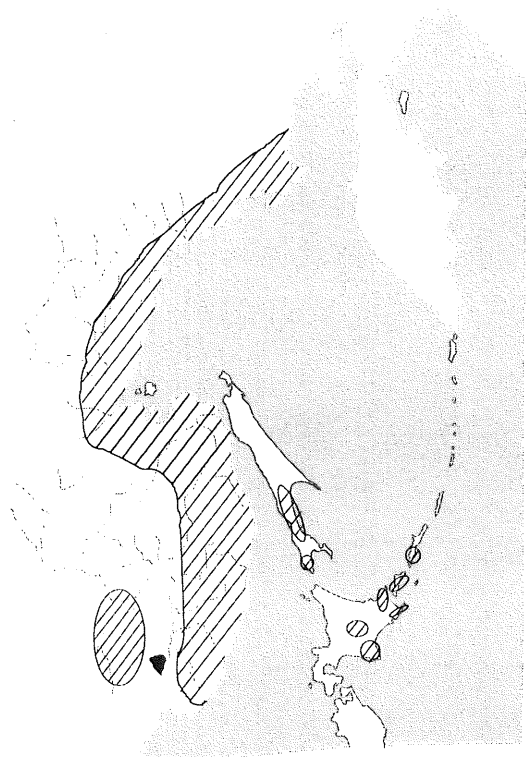


Fig.1 Distribution of Blakiston's Fish Owl

文化圏と重なることから、オホーツク文化との連続性を考察しなければならない。本研究は以上を主たる目的とするが、現段階では考察に足る情報が非常に少ないため、とりあえず既存の情報を整理することを第一の目的とした。

アイヌとシマフクロウの関係については、主に北大付属図書館で蝦夷地資料と郷土史を調査し、シマフクロウに関する記事を採用した。また、シマフクロウのイオマンテとの関連で、ヒグマのイオマンテやワシタカ類の飼育に関しても一部記述を採用した。ユーカラ調査と住民への直接の聞き取り調査は行わなかった。シマフクロウの生息調査と生息環境調査は、日本では北海道の各地と国後島、ロシアでは沿海地方とサハリン島で実施した。

調査結果

1. アイヌ時代のシマフクロウの記録

(1) シマフクロウの古記録

江戸時代、特に末期には公私多くの探検家が蝦夷地を訪れたが、そのいくつかにシマフクロウに関する記述が見られる (Table 1)。現調査時で最も古いシマフクロウの記録は、1688年に水戸藩の蝦夷地調査船、海風丸が松前を訪れた際の記述で、藩主からみやげ物として「たんちょう、しまふくろう、ひめゆり (黒)」をもらいうけている。アイヌ名に関する記載はないが、周辺記事として、アイヌは食料として、鶴、熊の子、白鳥、犬の類を籠をこしらえて飼いついて、食料が欠乏したときに用いる、と記載されている。また、坂倉源次郎の北海随筆の中で、1737年白老出身のアイヌに酒を馳走した礼として、「嶋梟」の一体分羽根を譲り受けている。また、梟のアイヌ名として「オタニマル」を記載している。周辺記事として、鷲は巣降ろしした後籠に入れて飼い、尾羽をとって交易に用い、熊も子供のうちにとって飼い置き、10月下旬に祭りを行って殺すとある。1781年には松前藩により松前志が記されたが、蝦夷地の物産としてシマフクロ、と記載があり、アイヌからメナシチカフ、カムイチカフと呼ばれ敬われるとある。周辺記事として交易資源としてのワシ

Table 1 The Major Description of Fish Owls in History before Meiji Era

Year	Place	Description	Fish Owl Name	References	Published
1688	-	Gift	Shima Fukurou	Kaifumaru Kiji	17C
1737	-	Gift	Shima Fukurou	Hokkai Zuihitsu	1739
-	-	General, Gift	Otanimaruru		
-	-	General, Gift	Shima Fukurou	Matsumae Shi	1781
-	-	General, Gift	Menashi Chikap		
-	-	General, Gift	Kamui Chikap		
1791	Yakumo	Feeding, Iyomante	Chikaf Kamui	Ezo no Teburi	
-	-	General, Gift	Shima Fukurou		
1857	Yuni	Feeding, Myth	Fukurou	Yuubari Nisshi	1862

タカ類の詳細な記述と共に、アイヌは巢鷹をよく育てている、と記載されている。ヒグマについても熊子を育てた後、祭りをを行い射殺すと記載がある。1791年に菅江真澄が北海道南部、現八雲町近辺で籠に飼育されているシマフクロウ（チカフカムイ）を目撃し、アイヌがヨマンという祭りをを行い、飼育した鳥獣を殺すと記載している。また、アイヌが屋内で熊子を飼育していることを記載している。松浦武四郎は1857年千歳地域の現由仁町で籠に飼育されているシマフクロウ、熊、鷺を目撃し、同時にアイヌがシマフクロウを大切にするのは、天地開闢時に始めの二神が他の多くの神を生み出した折にシマフクロウが関わったからである、と聞き書きしている。この場面は別に蝦夷漫画に絵として描かれている。

(2) シマフクロウの飼育とイオマンテの記録

シマフクロウの飼育とイオマンテは上記のように18世紀末ではすでに行われていたが、明治以降は現市町村で美幌、弟子屈、標茶、斜里、名寄、天塩、紋別、帯広、平取、新冠、静内、浦河、新十津川、千歳、栗山、鶴川、穂別、

長万部で記載があり、これに江戸時代の由仁、八雲の記録を加えた20市町村で飼育とイオマンテが記述されている(Table 2)。ただしイオマンテが明治時代に政府により禁止され、アイヌ文化が衰退し、加えてシマフクロウの減少が起こったために、イオマンテのほぼ全てが戦前に行われたものである。標茶のみでシマフクロウが実際にイオマンテで使われた遺跡がある。また、北大博物館には新十津川在住アイヌのシマフクロウイオマンテを再現したヌサがある。

Table 2 The Places Fish Owl Feeding and Iyomante Done

Place	Period	References
Bihoro	1910s	Hokkaido Board of Education(1983)
Teshikaga	1908	Sarashina/Sarashina(1977)
Shibecha	late 19C-1939	Satou(2001)
Shari	-	Sarashina(1955)
Nayoro	before 1940s	Sarashina(1956)
Teshio	-	Teshio-chou(1971)
Monbetsu	-	Sarashina(1960)
Obihiro	before 1940s	Hokkaido Board of Education(1988)
Biratori	before 1900	Batchelor(1901)
Niikappu	before 1940s	Sarashina/Sarashina(1977)
Shizunai	before 1940s	Sarashina(1963)
Urakawa	before 1940s	Hokkaido Board of Education(1985)
Shintotsukawa	1910s	Hokkaido Board of Education(1983)
Chitose	before 1940s	Hokkaido Board of Education(1991)
Kuriyama	-	Kuriyama-chou(1989)
Mukawa	-	Sarashina(1968)
Hobetsu	before 1940s	Hobetsu-chou(1968)
Yuni	1857	Matsuura(1862)
Yakumo	1791	Sugae(1791)
Oshamanbe	before 1940s	Sarashina(1970)

2. 北海道におけるシマフクロウの生息状況

北海道では現在50の生息地があり、シマフクロウの成鳥個体数は約120と見られている。

生息地の約 40%が知床半島周辺に集中している。現在繁殖つがいの約 40%が人工の巣箱を利用しているが、天然の樹洞木は全て広葉樹（ミズナラ、ニレ、シナノキ、カツラ）で平均胸高直径が約 100cm である。全生息地のうち 20%が養魚場や人工給餌に依存して生息しており、シマフクロウが安定的に自然生息する河川の魚類資源量は、100 平米あたり 1000g かつ 25 匹以上である。知床半島以外の地域では人間の保護を受けた環境下での生息地が多く、生息地の分断化や近親交配が顕著に表れている。行動圏は一般的に河川沿いに 10・15km をとる。

3. ロシアと国後島におけるシマフクロウの生息状況と環境

(1) サハリン

サハリンでは 1999 年 9 月と 2000 年 6 月にそれぞれ約 10 日間、自然度が高く狩猟保護地域になっているクリリオン半島でシマフクロウの調査を行った。現在クリリオン半島の南半分にあたるアニワ湾側のウリュウ川以南、日本海側のシェブニノ以南は集落がほとんどない。シマフクロウはアニワ湾に面する 3 河川（モグチ、ナイチャ、アニワ）および日本海側の 2 河川（クズネツォフカ、メジドゥレチエ付近）で目視および保護情報が得られたが、個体の確認には至らなかった。調査地域の動物相植物相はほぼ北海道と共通していた。河川の魚類はサケ科魚類に優占され、イトウ、オショロコマ、ヤマメ（サクラマス）、アメマスが確認され、特にオショロコマとヤマメの密度が非常に高かった。また春から秋にかけてサクラマス、カラフトマス、シロザケが大量に遡上し、河川の上流部まで埋め尽くされていた。河川や海岸周辺にはオジロワシ、ミサゴ、カワウソ、ヒグマ、タヌキ、キツネ、ゴマフアザラシ、トドなど、魚類を主食とする鳥獣類が多数生息していた。特に調査時はサケ類の遡上時期であったのでヒグマの痕跡河岸に途切れることなく続き、また足跡から判断された個体数密度も北海道に比べて非常に高かった。林内には北海道にいない生物としてジャコウジカの痕跡が多く見られた。いっぽう、エゾシカは自然分布せず、一部移入されたいが痕跡は無かった。またクロテンと思われる糞が多数見られた。いずれの河川も河口地帯は湿原やヨシ原、ササ原で比較的開けており過去の開発履歴を予想させた。河畔林はヤナギ類、斜面はトドマツ、シラカバを主とする森林で海岸近くの斜面で一部ミズナラが混じる。広葉樹がかなり少なく樹種は単調であった。また大径木はほとんど無く多くは二次林化していた。

(2) 国後島

国後島では北部のチャチャ岳南麓の 3 河川で 2000 年 5 月に約 10 日間調査を行った。調査地域は自然保護区で集落や一般人の入り込みはない。シマフクロウは非常に高密度に生息しており、繁殖も確認した。行動圏の大きさは北海道のものより明らかに小さい印象を受けた。河川の魚類はオショロコマとアメマスが優占し、魚類密度は知床半島とほぼ同じであった。またヤマメ（サクラマス）がわずかに採取された。情報では回遊魚としてキュ

ウリウオ、ウグイ、カラフトマス、シロザケ、シシヤモが大量に遡上する。また、ギンザケやベニザケもわずかに遡上する。他の動物ではヒグマが高密度に分布しており体サイズが大きな印象を受けた。オジロワシも高密度に分布し一部繁殖を確認した。海岸にはゴマフアザラシが散見された。林内ではクロテンが高密度に生息しておりしばしば目視した。いっぽう、エゾシカは自然分布していない。カワウソの生息情報は不明である。河口地帯の平地は戦前に日本の大規模な集落があったためササ原となり開けている。河畔林は非常に単調なオオバヤナギ林で台地上はトドマツ、エゾマツの針葉樹にほぼ占められる。山地斜面はシラカバの二次林と針葉樹林であるが、しばしばササ原のパッチが見られる。樹種は総じて単調でタイガの様相を示し、ハルニレなど広葉樹は極めて少ない。シマフクロウの営巣木は河畔林のオオバヤナギ (DBH=114cm, 110cm, 他 3 本) がほとんどで、1 本のみダケカンバ (DBH=96cm) があった。

(3) 沿海地方日本海沿岸

沿海地方では 2000 年 11 月および 2001 年 6 月にそれぞれ 10 日間、主にテルネイ地域の 1 流域を中心に調査を行った。河口部に 300 軒規模の集落があり、狩猟、林業、水産業を主体とする。シマフクロウは高密度に生息しており、行動圏は河川沿いに 6・8km であると推定され、北海道の個体の行動圏より明らかに小さかった (Fig.2)。営巣木はドロノキ (DBH99cm)、ドロノキ (DBH96cm)、ハルニレ (DBH89cm) であった。河畔林はハルニレ、ドロノキ、チョウセンゴヨウ、イタヤカエデ、ヤナギ類で樹種が豊富で大径木が多く、斜面林はミズナラ、シラカバ、トドマツ、チョウセンゴヨウが優占するが、一部山火事や伐採などで二次林化していた。主要な樹種はチョウセンゴヨウ以外ほとんど北海道と共通し景観が似ていた。河川魚類はヤマメ (サクラマス)、ホッキョクイ

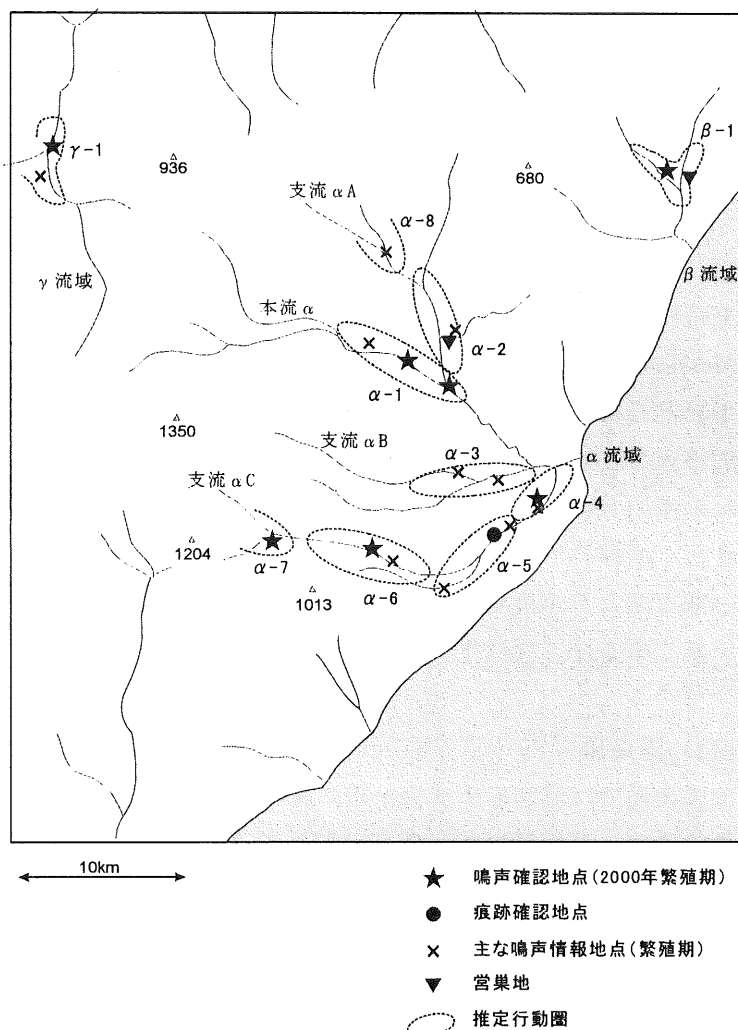


Fig.2 Fish Owls distribution in Ternei Region

ワナ、アメマスが主要で、さらにカラフトマス、シロザケ、ウグイなどが大量に遡上する。ホッキョクイワナはオシヨロコマに酷似するが、降海遡上を繰り返す。魚類密度はきわめて高い。哺乳類はヒグマ、ツキノワグマ、トラ、イノシシ、ジャコウジカ、アカシカ、ノロシカ、エゾシカ、カワウソ、クロテン、アメリカミンクなど非常に多様度が高いが、狩猟圧の影響で痕跡以外は人目に触れることが少ない。

サマルガ地方ではロシアの共同研究者チームが調査を行い、シマフクロウの生息を確認した。付属断片情報として、地元ウデゲ猟師がシマフクロウの皮脂から民間薬を作るために毎年3・5羽を捕獲するという情報を得た。しかしながら、当該猟師が2001年に死去したため詳細は不明である。

考察

本調査では断片的な情報がほとんどで、シマフクロウとアイヌの関係、さらにはオホーツク文化との関連について考察に足る材料がほとんどないが、いくつかの示唆に富む知見を得ることができた。

シマフクロウの和名呼び名は17世紀末にはすでに使用されていることから、少なくとも松前藩にとっては周知、かつ本州には珍しい生き物として認識されていたと思われる。現在は文献が見あたらないが、今後さらに古い記録と詳述が出ることを期待したい。各探検記録で18世紀にはシマフクロウがアイヌに敬われており、すでにイオマンテが行われていることが述べられていることから、シマフクロウがアイヌの中で高位に位置付けられたのは18世紀以前からであることは明らかである。いっぽう、シマフクロウの飼育の記述が見られる文献にはほとんど全て同時に熊や鷲の飼育についても述べられている。特に鷲についてはかなり早い時期から尾羽や幼鳥を交易に使用したことが述べられており興味深い。熊もイオマンテ後の毛皮などを交易に用いたことが記されており、飼育と交易の繋がり是非常に強い。いっぽう、海風丸の記録の中に、アイヌが籠の中に鳥獣を飼い、食糧難の折に食べることが記されていることから、飼育と食料との関係も強い。しかしながら、シマフクロウは交易や食料としては積極的に用いられた証拠がないため、熊や鷲のような物質的価値を持たないと考えられるため、位置付け起源が他の動物と明らかに違うことが考えられる。宇田川(1989)は熊の飼育型のイオマンテ儀礼の確立は18世紀後半以降としており、シマフクロウも記録からほぼ同時期と思われるが、今後これらイオマンテ確立以前のシマフクロウの扱いについて情報を収集することが、アイヌの精神世界確立過程を知る上で重要であろう。更科はしばしばオホーツク海沿岸や内浦湾など海猟に依存した地域ではシマフクロウの地付けが低くなると述べていることから(更科・更科 1977 など)、北方諸民族の中でのシマフクロウの扱われ方を調査することは非常に興味深いと思われる。

ところで、シマフクロウの生態面を見ると、シマフクロウが他の動物と一線を隔てる理由の示唆になるかもしれない。シマフクロウは定着性が非常に強く、一度行動圏を決める

と死ぬまで維持しつづける。行動圏の大きさは現在の北海道の状況では河川沿いに10-15kmだが、過去の良い環境下では10km前後であったと考えられる。縄張りには強硬に主張し、他つがいを縄張り内に許容することはない。鳴声は他の鳥類と違い繁殖期以外でも年間を通してしばしば鳴き、条件がよければ1.5km以上聞こえることがある。鳴声は日没後約10-30分続き、以後夜間に時々、明け方にねぐら入りでまた10分程度鳴くことが多い。寿命は自然状態ではおそらく20年以上に達する。人間を見慣れている個体はしばしば警戒心が薄く繁殖期以外はあまり逃げない。営巣木は複数持つがおおむね決まった大木を使う。冬季も凍結しない湧水地は魚類が豊富でサケ科魚類の産卵床になるため、おおむね行動圏の核はそのような場所を取る。すなわち、シマフクロウは非常に定点的、かつ個別家族群の要素が強い。そしてシマフクロウの良好な生息地は当然アイヌ民族にとっても良好な居住空間や猟場である。シマフクロウの主要利用場所とアイヌの主要利用場所が完全に重複する上、特定家族群が長い世代生息するため、個体識別に類する行為や歴史認識も可能である。またほぼ年間を通してアイヌが屋外活動をやめる時間に鳴声を挙げるため、村を守っているという意識を持たれたことは極めて理解しやすい。今後さらに民俗的な調査を掘り起こすことによって、シマフクロウの実際の生態から見た解釈が具体的に明らかになると考えられる。

いずれにしても、シマフクロウが過去に十分に生息し、シマフクロウやアイヌが利用していた生物資源量を明らかにすることは、オホーツク文化とアイヌの繋がりを考える上でも重要であろう。周辺地域は北海道の原生環境とは少しずつ違うが、まず、魚類の生息状況は国後やサハリン南部に良好に保たれている。魚類資源に依存した他の鳥獣、例えばヒグマの状況も国後やサハリンが参考になるであろう。ただし、過去の北海道には狩猟圧があったことを考慮しなければならない。また、エゾシカが大量に分布したのは北海道だけである。またこれら地域は残念ながら森林環境が北海道よりは北方系に属し、また戦前に急速な伐採が入ったことや山火事が絶えないことからあまり良好であるとは言えない。森林環境は沿海地方の河川流域に北海道とほぼ同じ植生が良好に保たれているので大いに参考になる。ただし、哺乳類相は大きく違う。注目しなければならないのは、北海道周辺の地域は地理条件で気候条件が大きく変わり、それに応じて植物相や動物相が劇的に変化することである。自然資源に依存した生活を送るほど地域性を反映することが予想されるため、環境を一般化、単純化するのは危険であろう。

今回の調査研究で、北海道の過去の環境の多くが北海道を取り巻く地域に残されていることが明らかになった。現地調査を行った際の最も大きな印象は、いずれの地域も魚類資源量が非常に高く、またそれを基盤とした自然生態系が良好に保たれており驚いたことである。戦前の北海道の郷土史やアイヌ民俗調査では季節毎の回遊魚にあわせた様々な活動が記載されているが、現在の北海道では想像し得ない状況が北海道周辺には未だに展開されており、アイヌやオホーツク文化人の漁労と肉食性鳥獣の狩猟活動を理解する上では、実際に環境を見ることが、陸上生物、海獣、回遊魚、海鳥、渡り鳥など、様々な生物の分

布と現存量の把握、食物連鎖の定量化への具体的なアプローチが必要である。さらに加えて言えば、北海道周辺地域は戦後の国境警備の関係で人間活動が制限されたため自然度が良好に保たれた要素が非常に強く、今後経済状況の変化と共に急速に環境が悪化することが考えられるため、文化遺産、自然遺産の両面から今後の保全についても早急に考える必要がある。

引用文献

- Batchelor, J. (1901). The Ainu and Their Folk-Lore. The Religious Tract Society, London. (安田一郎訳, 青土社, 1995)
- 穂別町編 (1968). 穂別町史
- 北海道教育委員会 (1983). 昭和 57 年度アイヌ民俗文化財調査報告書 2.
- 北海道教育委員会 (1985). 昭和 59 年度アイヌ民俗文化財調査報告書 4.
- 北海道教育委員会 (1988). 昭和 62 年度アイヌ民俗文化財調査報告書 7.
- 北海道教育委員会 (1991). 平成 2 年度アイヌ民俗文化財調査報告書 10.
- 北海道郷土研究 (1918). 快風丸記事.
- 栗山町編 (1989). 栗山町史
- 松前広重 (1818). 松前志.
- 松浦武四郎 (1859). 蝦夷漫画.
- 松浦武四郎 (1862). 夕張日誌.
- 坂倉源次郎 (1739). 北海随筆
- 更科源蔵 (1955). アイヌ生活. 斜里町史
- 更科源蔵 (1956). 天塩川筋のアイヌ生活. 名寄町史, 35-94
- 更科源蔵 (1960). アイヌ文化. 紋別市史
- 更科源蔵 (1963). アイヌ文化. 静内町史, 115p.
- 更科源蔵 (1968). 鶴川周辺のアイヌ文化. 鶴川町史
- 更科源蔵 (1970). アイヌと日本人. NHK ブックス, 東京, 252pp.
- 更科源蔵・更科光 (1977). コタン生物記 3. 法政大学出版, 東京, 546-558.
- 佐藤孝雄 (2001). シマフクロウ送りの考古学. 東北学, Vol.4
- 菅江真澄 (1791). えぞのてぶり
- 天塩町編 (1971). 天塩町史
- 宇田川洋 (1989). イオマンテの考古学. 東大出版会, 東京, 124pp.